



Report 131 言語聴覚士

春日居サイバーナイフ・リハビリ病院 言語療法科副部長 内山量史さん(45)

会話と飲食のリハビリ手伝う

病気や事故で言葉をうまく話せなくなった人、正しく記憶ができなくなった人たちに、コミュニケーションの回復訓練をするのが言語聴覚士(ST)です。食事をのみ込む機能を回復させる手伝いもします。春日居サイバーナイフ・リハビリ病院(山梨県笛吹市)の内山量史さんは「言語聴覚士はまだまだ数が足りません。一人でも多くの人にこの仕事を知ってもらいたい」と願っています。(今井尚)



絵カードを使って言葉を思い出す訓練をする内山量史さん(右) = どれも山梨県笛吹市の春日居サイバーナイフ・リハビリ病院で

訓練で少しずつ前進して笑顔に

▲ものをのみ込めなくなる「嚥下障害」へのリハビリも言語聴覚士の仕事です。▲新聞記事を読みながら対話訓練。右は内山さんと一緒に働く言語聴覚士の佐々木蘭子さん

病院内では、さまざまな専門家がチームをつくって患者の回復を目指します。治療をするのは医師。治療の手伝いや患者の世話をするのは看護師。病気がけがによつて弱まった体の機能を回復させるリハビリテーション(リハビリ)をするのは技師で、言語聴覚士(ST)はその一つです。

リハビリの技師には他に、けがや病気をした人が再び歩けるよう訓練するなど運動面を担当する理学療法士(PT)、日常の作業趣味や仕事を通して社会に復帰する訓練を担当する作業療法士(OT)がいます。言語聴覚士が主に担当するのは、脳血管障害や交通事故などによつて、脳の言葉をつかさどる部分に障害がある人です。会話と

嚥下(のみ込むこと)の機能回復も手伝います。Aさんは脳出血により、発する言葉がうまく見づらなくなる失語症になりました。絵が描かれたカードを使い、内山さんが「これは何ですか?」と呼びかけ、できればそれを題材に短い会話をする訓練をしています。

脳梗塞(のうこうそく)で入院したBさんも失語症で、最初はほとんど会話ができませんでした。ところが今は新聞記事を題材に、会話を始めるようになりました。「少しずつ話ができるようになり、気持ちも軽くなりました」とBさん。

Cさんは脳出血で体の一部がまひし、食べ物のみ込んで食事をするのができなくなりました。栄養はチューブを使って胃に直接送り込んでいます。内山さんは29歳の小さなぶどうゼリーをスプーンでCさんの口に運びました。Cさんは自分で口を開け、のみ込むことができました。内山さんから思わず笑

内山量史さんのおゆみ

1967年 三重県の漁師町に生まれる 幼少期

「父親が遠洋マグロ漁船に乗っていたので、母や祖母などとよく話をしました」

中学生時代 野球に熱中。社会人になってからも野球を続けていた
高校卒業後 福井医療技術専門学校(現・福井医療短期大学)で言語聴覚の分野を勉強する
1990年 春日居リハビリテーション病院(現在の春日居サイバーナイフ・リハビリ病院)に就職
1997年 国家資格ができ、資格を取得
現在 日本言語聴覚士協会の常任理事として、言語聴覚士の仕事を伝えたり、言語聴覚士の卵(実習生)の受け入れ・指導をしたりしている

言語聴覚士 になるには

高校卒業後、国指定の養成校(3~4年)に進むか、一般大学を卒業後に専修学校(2年)に進むのが一般的です。いずれにしても国家試験に合格し、免許をもらう必要があります。約8割が女性です。医療系の仕事でありながら夜勤はなく、子育てなどで一度仕事を辞めても再就職しやすいのが特徴です。
【給与】初任給の平均は月額約22~24万円

数が少ないST 認知度高めたい

三重県で生まれ育った内山さんは中学生時代、野球が大好きでした。選手がけがをして病院に行くこと、病院内ではリハビリの専門家がいて、お母

さんが看護師をしていたこともあり、言語聴覚士という仕事があることを知ったのは「自分で味を感じられることは大きな喜びのほうです。小さな進歩ですが、階段を一段ずつのぼっていくように、少しでも前に進むことのお手伝いができたく、この仕事をしていてよかったと感じます」。

1997年に国家資格ができ、現在は全国70の学校で勉強できるようになり、言語聴覚士の数も約2万2千人にまで増えました。ただ、1965年から認定が始まった理学療法士が10万人以上いるのに比べると、まだ数が少ないです。



春日居サイバーナイフ・リハビリ病院では言語聴覚士も含め89人のリハビリ専門スタッフが働いています

先輩からのメッセージ 世代を超えて話す経験を

中学生時代までに健康な体をつくり、たくさん友達をつくってください。幅広い年齢、特に高齢の方と接する仕事なので、普段からおじいちゃんやおばあちゃんなど違う世代の人と積極的に話をすることは将来役に立つでしょう。私は患者さんに接するとき、この人が入院する前はどんな暮らしをしていたのかを想像するようにしています。